

---

# 同窓会

雄輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同窓会

### 【著者名】

NZマーク

1

### 【あらすじ】

同窓会でひさしぶりにあった、元彼女の里奈。優斗は、昔の傷を思い出さないように里奈としゃべらないようにする。だが、同窓会が終わった後、公園で里奈と会ってしまう。

(前書き)

初めての投稿です。よろしければ感想をくれると嬉しいです。  
この小説の評価よければ、この小説の高校時代などを書くつもりです。

「みんな、ひさしひぶり。」

「優斗じやん。」

「ゆうぢやんだ。」

「遅いぞ。来るのが。」

「そうだよ。1時間も遅刻だよ。」

「ごめん！起きたらもう7時半だった。」

「まあ、優斗が遅刻しないで来たら奇跡だけどね。」

「別に奇跡ではないだろ。」

「学校だつて、ほとんど最初のHRに出てないじやん。」

「あれは朝に弱かつたからだ。」

そう言つてあたりを見回した。

俺の前にいるのは、女二人に男一人だ。

この三人はあまり変わつてなかつたが、見た感じけつこう変わつている人がいる。

「まだ、来てないよ。」

「わあ！」

びつくりさせるつもりだつたのだろうが、気付いてからやつてもだめだろう。と思ったが、気にしないことにする。

「来てないって、誰が？」

「誤魔化しちゃダメだよ。」

さつきびつくりさせられなかつたので、ちょっと不機嫌だ。

「ごめん。遅れた。」

走つて来たのだろう、疲れている。

「謝つてきなよ。」

「いや、俺は別に何も悪いことはしてない。あっちがかつてこ怒つただけだ。」

と言つて、この場所を離れようとした時だつた。

「結花ひさしぶり。優斗もひさしぶり。」

「ひさしぶりだね～。里奈ちゃん。」

「ああ。」

「もう少しーーー反応できないの～。」

「できない。俺あっち行くから。」

何かいろいろなことを言われたが気にしないで行った。

同窓会が終わり、公園で休憩してる。

「眠い。」

このままここで寝たい。

同窓会はまた来年やるらしい。

正直、同窓会に出るのは辛い。昔の友達に会えるのは楽しいが、行くと辛い思い出がよみがえってくる。来年は行かないと思う。

「優斗。」

振り返ると。

「里奈。」

里奈がいた。もともと彼女だったが、高校の卒業式の日にいろいろあって、別れた。

「優斗。あの時のことまだ怒ってる？」

「別に。」

本当は怒っている。

しかし、もう昔のことはどうでもよかつた。

里奈のことはもう忘れたかった。

だから、早く話を終わりにしたかった。

「顔が怒ってるけど。」

「もともとこの顔だ。」

俺には、彼女が話しかけてくる理由が分からなかつた。

「俺に話しかけるな。」

ちよつと悲しそうな顔した。

俺はますます分からなかつた。

なぜそんな顔するのか。

「優斗冷たいね。前はあんなに優しかつたのに。」

「そんな話もういいだろ！俺は里奈のことは忘れる。だから、もつ俺前に顔出さないでくれ。」

何も言い返してこなかつた。俺はこれ以上いるのはやだつたので帰ろうとした。

「優斗行かないで。」

振り返ると、里奈は泣いていた。

「なんで、泣いてるんだよ。」

ちよつと苛ついたが、冷静になつて言つた。

「優斗が私のこと忘れるつて言つたから。」

「何なんだよー！裏切つたのは、お前だろー！もうつい加減忘れたいんだよ！」

彼女のが全く分からぬ。

裏切つて、俺を傷つけて、まだたりないのか。

俺は怒りの限界だつた。

「確かに裏切つたけど、私は優斗のことが忘れられないの！何度も忘れようと思つたけど無理だつたの！私は優斗のことが好きなの！」

そう言つて彼女は泣き崩れた。

俺はどうすればいいか分からなかつた。

確かに俺は今でも、里奈は好きだ。

でも、俺は里奈のことが分からない。

なぜあの時裏切つておきながら、今になつてこんなことを言つただろうか？

俺があれこれ考へているうちに、里奈は立つていた。

もう泣いてないみたいだつた。

「そんなこと今さら言つても無理だよね。」

頭の中がパンクしそうだつた。

「言いたいこと言えてよかつたよ。優斗さよなら。」

「里奈。」

そう言つて里奈を抱いた。

「優斗。」

里奈は泣きそつな目で見てきた。

「自分で、言いたいこと言つて帰るのはするいよ。俺だつて、里奈こと好きだ。やり直したいさ。でも、怖かつたんだよ。また、

傷つきたくなかった。」

「ごめん。私があなんことしなければ。」

「もういいよ。また、一人でやり直そう。」

「うん。ありがとう。」

嬉しかつた。またもとに戻れて。言いたいことも言えて。

「青春つていいね~。」

「結花！いつからいたんだ。」

「優斗が、もともとこの顔だつて言つた時からだよ~。」

ほとんど最初からだ。

「何恥ずかしがつてるの~。まあ~最後らへんは、見てる~いつも恥ずかしかつたけどね~。」

里奈を見ると、顔が真っ赤だつた。

俺も顔が赤いと思う。

「じゃあ、私帰るね~。今日は楽しいもの見れたし。満足だよ

。」

結花は帰つていった。

「じゃあ、俺らも帰るか。」

「うん。」

。」

里奈を好きになつてよかつたと思つ。

いろんなことがあつたけど、今俺は幸せだ！

(後書き)

最後まで、小説を読んでくださりありがとうございました。前書きでも書きましたが、感想をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7071c/>

---

同窓会

2010年12月10日05時48分発行